

# 宮古新報 事業譲渡 自主発行 雇用守る



贈られたたれ幕・横断幕の前でガッツポーズをする組合員ら

## 人手不足 支援継続を

宮古新報組の社長陣闘争で、1月23日、事業譲渡が成立し、新体制で発行継続のめどが立った。1月10日に宮古新報社(座喜味弘二社長)は資金繰りを理由に全社員を解雇したが、組合の就労闘争と自主発行の闘いが新聞と雇用を守った。譲渡先は会社の顧問税理士・松川吉雄氏だった。新聞労連の近年の歴史の中でもまれに見る闘いとなった。

12月25日、会社は事業譲渡交渉を進め、「永久に事業は継続されます」と座喜味弘二社長名で関係者に文書で表明していた。年明け1月10日、一転して会社は全社員解雇の暴挙に出た。組合はこれに對抗し、11日付け紙面で予定していた「廃刊」の社告を指名した「廃刊」の社告を指名した。組合は職場を占拠して、8人減となった組合員10人で、8から4にペーシを減らして自主発行を続けた。12日、会社は解雇しながら、引き続き事業譲渡の交渉を進めていると表明した。

11月17日	第1回同交。組合がハラスメント撲滅等のため社長に退陣を要求。
12月15日	第2回同交。松川税理士が年度末で3000万円赤字見込みと説明。弁護士が清算か事業譲渡を示唆
12月25日	第3回同交。譲渡交渉を継続、会社が関係者に「永久に事業を継続」と文書発行
1月4日	組合が労務委に社長の組合敵視と同交促進等のあっせんを申請
1月9日	弁護士が組合に10日の新聞製作で廃刊・全員解雇を口頭通知
1月10日	全社員に解雇通知書を発行。新聞労連が記者会見。廃刊の社告を指名して阻止
1月11日	組合が記者会見。解雇反対・就労闘争で12日以降の新聞を減ページで発行継続
1月13日	紙面で組合の取り組みを伝えるコラム「社窓風景」開始
1月15日	組合が労務委に組合敵視の不当解雇等で不当労働行為救済を申立て
1月21日	枯湯寸前だった新聞ロール紙を松川税理士が即金で購入して翌日搬入
1月23日	弁護士が譲渡契約を完了したと組合に通知。譲渡先は松川税理士
1月28日	組合は会社と松川税理士に人員増など発行継続の要求書を提出、会社代理人が回答拒否
2月1日	組合員と譲渡先が雇用契約を締結(予定)

18日は新聞のロール紙の枯湯が懸念された。組合は会社に対し立替払いを覚悟し、20日に紙の購入を会社に迫ると、翌21日、松川税理士事務所から紙代が送金され、22日にはロール紙が搬入された。会社から事業譲渡成立の報を受けたのは23日の夜だった。こうして危機を乗り越え、2月1日には組合員全

員が再雇用契約を結ぶ予定だ。譲渡後、沖縄県二紙の取材で松川税理士は「解雇後も新聞発行を続ける皆さんに感動した」と引き受けた理由を述べている。しかし、事業を買い取った松川氏は12月15日の団体交渉で、年度末で3000万円の赤字と説明していた。財務状況を税理士が、あえて赤字会社を引き取る理由が不透明だ。また、人員不足が克服できなければ8ページに戻せない。譲渡されても課題は解決していない。2月20日10時半から沖縄県労働委員会、あっせん不当労働行為の第1回調査が始まる。清算する宮古新報社に対して、不当解雇の責任追及、未払い賃金と解決金を求める闘いが待っている。全国の支援を引き続きお願いしたい。

【山陽労組・藤井正人】

## 女性役員3割超へ

### 臨時大会 規約改正案を可決

新聞労連は1月23、24日、東京・浅草で第133回春闘臨時大会を開き、別統一スト権を確立。中執行委員(女性枠)を設ける一立した。

新聞労連の役員である中央執行委員はこれまで「全男女性」になることが多かった。今回の規約改正では、ジェンダーバランスを大幅に改善する観点から、従来の中央執行委員(23人)とは別に、最大10人の「特別中央執行委員」(女性枠)を設ける。権限は中央執行委員と同じで、仮に従来の中央執行委員の枠が「全男女性」であっても、中央執行委員会で意思決定に加わる女性役員を3割超にする仕組みだ。

新聞労連は昨年7月、労組役員女性の比率を「可能な組合から3割以上」という運動方針を決定。その後、同年12月に100人を超す有志から「女性枠」創設を求め、読者に信頼される新聞をつくるという特別決議もした。

山陽新聞労組と新聞労連は2月8日、元文部科学事務次官の前川喜平さんとジャーナリスト三宅勝久さんを招いたフォーラム「前川喜平さんと考えるメディアのあり方」を開催。岡山市勤労者福祉センターで午後6時半から。入場料は無料。

【山陽新聞労組・前川喜平さん】



発行日 2019年2月1日

日本新聞労働組合連合 東京都文京区本郷2丁目17-17 井門本郷ビル6階 電話 03(5842)2201 FAX 03(5842)2250 ホームページ http://www.shinbunoren.or.jp/ アドレス shinbunoren.or.jp/ (年間購読送料共2000円) (組合員の購読料は組合費に含めて徴収しています)

### 創設する「女性枠」の概要

最大10人の「特別中央執行委員」を創設。「特別」とは、ジェンダーバランスを改善するために中央委員登録されていない組合員からの選出に道を開く意味で、権限は従来の中央執行委員と同じ。任期も1年。

・ジェンダーバランス改善のための措置で、中央執行委員会が選出を「必要」と判断した場合に公募する。当面3年程度を想定。その間、女性に関連するプロジェクトチームも推進する。

設を求める意見書が新聞労連本部に寄せられた。南彰中央執行委員長は提案理由説明で「まずは新聞労働者全体を代表する労連本部が率先して目標を実現したい。多くの仲間や将来世代が希望を持って働ける新聞業界を、労働組合から作っていく一歩」と訴えた。特別中央執行委員は公募する。今後、中央執行委員会で公募要件を詰め、7月の定期大会で新しい体制を発足させたい考えだ。

山陽新聞の加計問題を伝える紙面が歪んでいる。加計問題は時の首相の政権運営にかかわる問題。しかし、会長が学園理事を務めていることへの忖度からか、同紙は一貫して目立たぬよう小さく扱ってきた。たとえば、加計学園理事長が昨年10月7日、今治市で二度目の会見を開いたことを伝える翌8日付紙面。他紙が1面トップで扱った

【山陽新聞労組・藤井正人】

### 2月8日に岡山集会

### 歪む山陽の報道 前川氏と考える



川喜平さんと考えるメディアのあり方。これでもいいの？山陽新聞を開く。岡山市勤労者福祉センターで午後6時半から。入場料は無料。山陽新聞の加計問題を伝える紙面が歪んでいる。加計問題は時の首相の政権運営にかかわる問題。しかし、会長が学園理事を務めていることへの忖度からか、同紙は一貫して目立たぬよう小さく扱ってきた。たとえば、加計学園理事長が昨年10月7日、今治市で二度目の会見を開いたことを伝える翌8日付紙面。他紙が1面トップで扱った

【山陽新聞労組・藤井正人】



# 読者に信頼される新聞目指して



緑川(宮古新報労組)



山下(宮古毎日労組)

第133回春闘臨時大会では、2日間にわたって代議員および地連役員ら17人が発言した。発言要旨は次の通り。(敬称略)

## 発行継続に向け支援を

宮古新報労組(緑川幸子) 1月10日に社長が全解雇を宣言したが、私たち10人は納得できなかった。地域とともに歩んで来た新聞社が読者に何の説明もなく発行を中止することは絶対に許さず、断固として発行を続ける。南委員長は「多くの人を雇って、断固として発行を続ける。南委員長は多くの人を雇って、断固として発行を続ける。南委員長は多くの人を雇って、断固として発行を続ける。」



春闘に向け活発な議論が行われた臨時大会

## 不当配転争議、全力で闘う

山陽労組(田淵信吾) 2014年12月から2017年12月まで、約3年間にわたる不当配転争議。役員会の不正配転行為が認められ、役員会を廃止し、新しい役員会を選出する。全力で闘う。



田淵(山陽労組)



寺田(東京地連)



石川(中国地連)



宮里(沖タイ労組)



外間(沖縄地連)

## 沖繩2紙、連携して交渉

沖タイ労組(宮里直也) 琉球・沖タイ両社による印刷協業化問題について、2紙が連携して交渉を進める。



山内(愛媛労組)



坂本(苫小牧労組)



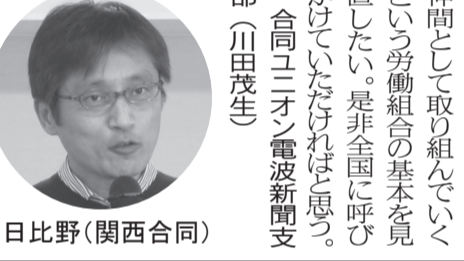
川田(合同ユニオン)

## 小規模単組も大会参加を

苫小牧労組(坂本一進) 昨年の東胆振地震の折には、全国の各単組から激励、支援カンパを頂いた。この場を借りてお礼申し上げる。



加藤(北日本労組)



日比野(関西合同)

## 女性枠で多様な意見期待

報知労組(加藤弘志) スポーツ紙の主眼者は男性だが、昨今変わってきており、女性向けのコンテンツが求められている。



加藤(報知労組)

## 19春闘統一行動日程

大会で決定した19春闘統一行動日程は以下の通り。  
①第1次総行動日：要求提出日 2月21日(木)  
②第2次総行動日：回答指定日 3月7日(木)  
③第3次総行動日：回答指定日 3月14日(木)  
④第4次総行動日：回答指定日 3月20日(水)  
⑤第5次総行動日：回答指定日 3月27日(水)  
⑥第6次総行動日：回答指定日 4月4日(木)  
⑦第7次総行動日：回答指定日 4月10日(水)  
⑧第8次総行動日：回答指定日 4月17日(水)



山本(東京労組)



金谷(共同労組)



山口(長崎労組)



松井(共同労組)

## 手当カット筋通して闘う

東京労組(山本親弘) ペアと家族手当1000円削減の抱き合わせ回答が7年続いている。多額の削減に闘う。

社外活動記者への裁量労働制導入方針を示した。長時間労働や過労死の温床となる。闘う。

女性枠の創設案について、意見が反映され、次世代に新聞を継承していくためにも、女性枠に期待したい。

## 女性枠創設の規約改正議論

第3回拡大中執 女性枠創設の規約改正議論。女性枠の創設は、女性記者の増加を促進し、多様な意見の発表を期待する。

## 相川書記長・討論のまとめ

女性枠単組事情に配慮。相川書記長の討論のまとめ。女性枠の創設は、女性記者の増加を促進し、多様な意見の発表を期待する。

## ジャーナリズム大賞選評

青木理 選考委員 応募作品が8作あり、品と非常になかった。しかし、きつと光るものがあった。全の賞を満場一致で選考した。

## 労連70年大賞の在り方議論を

定田桂一郎賞は『過労も考え直した方がいい』。労連70年大賞の在り方議論を。労連の役割を再考する。

## 女性枠創設の規約改正

女性枠創設の規約改正。女性枠の創設は、女性記者の増加を促進し、多様な意見の発表を期待する。

女性枠創設の規約改正。女性枠の創設は、女性記者の増加を促進し、多様な意見の発表を期待する。



受賞を喜ぶ受賞者(前列、左は定田妙子さん)

第23回新聞労連ジャーナリズム大賞と第13回定田桂一郎賞の授賞式が1月23日、台東区民益館で行われ、青木理選考委員が受賞者に賞状や副賞を授与した。大賞は「フアクトチェック」に取り組み、NPO法

応募作品が8作あり、品と非常になかった。しかし、きつと光るものがあった。全の賞を満場一致で選考した。

大賞は「沖縄県知事選に関する情報のフアクトチェック」に関する情報のフアクトチェック。優秀賞は「自分らしく生きる」。

女性枠の提案は組合活動に積極的だった。若手記者が活躍の場を確保する。

女性枠創設の規約改正。女性枠の創設は、女性記者の増加を促進し、多様な意見の発表を期待する。

女性枠単組事情に配慮。女性枠の創設は、女性記者の増加を促進し、多様な意見の発表を期待する。

女性枠創設の規約改正。女性枠の創設は、女性記者の増加を促進し、多様な意見の発表を期待する。

女性枠創設の規約改正。女性枠の創設は、女性記者の増加を促進し、多様な意見の発表を期待する。



# 各地連で

## 春闘集会・常任委員会

### 東京「山陽・宮古支援を」

東京地連・関東地連の合同春闘集会が1月18、19日、栃木県日光市の鬼怒川温泉で開かれ、両地連から約50人が参加した。

冒頭、関東地連の元川裕史委員長が「春闘に向けて、若い人が目指したいと思える働き方の環境づくりをしたい」とあいさつ。東京地連の桑田真委員長も「山陽新聞、宮古新報の両労働組合が頑張っている。東京地連としても支援するつもりで、会場で意見を交わし、議論を尽くしたい」と呼びかけた。

初日の単組報告では、各単組が抱える課題や19春闘への対応方針の現状が報告された。続いてFIFAの元国際副審で、2010、14、18年のサッカーワールドカップ3大会で副審を務めた。

めた相澤亨さん(栃木県壬生町出身)が「W杯3大会の舞台裏」と題し講演。「怒っている選手に詰め寄せられたら、その選手ではなく周囲がどう見ているかに注意を集中させる」など、組合活動にも通ずるマネジメント力について解説した。

2日目の分科会は、産業政策研究部、新聞研究部などに分かれて議論。改元にならなだ報道や広告企画、若手社員のスキルアップや離職防止対策などについて意見を交わした。

【主幹野新聞労組・手塚京一】

### 北信越 青女部もイベント

北信越地連の第1回拡大常任委員会・青年女性協議会ウインターフェスが1月10、11の両日、新潟市で開かれ、各単組が秋年末闘争の結果を報告し意見を交わした。学習会では、新潟大が提唱する「日本酒学」に関する講演があり、清酒の魅力に理解を深めた。

初日は、新潟日報メディアアシップで会議を開き、酒井哲彦地連委員長があいさつ。新潟日報労組の等原武史委員長が歓迎あいさつをした。

学習会では、新潟清酒達人検定の「金の達人」で、新潟大学法学部助手の渡辺英雄氏が講演し、同大に「日本酒学センター」を設置したことを紹介。日本酒学について、商品開発や製造、流通から酒の歴史や伝統文化など全体を網羅的に研究するものとした。「きき酒」もあり、参加者は3種類を飲み比べ、原材料選びや製造技術によって多様な味わいが生み出されることを実感していた。

2日目は、新潟日报社が制作した映画「ミッドナイト・バス」を観賞。上映後には同社担当者が制作の経緯を説明し、アウハウのな

### 中国 働き方改革テーマ

中国・四国地連春闘討論集会が1月18、19の両日、松山市の愛媛新聞別館で開かれた。新聞労連の南彰委員長と伊藤明弘書記次長を招き、両地連加盟9単組の38人が働き方改革をテーマに議論を深めた。

初日は伊藤書記次長が講演し、このほど労連が加盟単組から集めた働き方改革に関するアンケートの結果を分析し、要求づくりのポイントを解説した。

伊藤書記次長は、4月から義務付けられる年間5日間の有給休暇取得への対応をしている社が少ないと批判。一方、連続有給休暇を要求に掲げる労組は多いとし、春闘でもこの動きを強

い中で苦労の連続だったことが、12万人を動員することになったと語った。

【北日本新聞労組・高橋良輔】

宮古島にゆかりがある新潟県人がある。新潟県上越市板倉区出身の中村十作(1867〜1943年)。十作は真珠養殖事業を志して宮古島に渡るが、そこで目にしたのは人頭税という過酷な課税に苦しむ島民の姿だった。十作は帝国議会へ直接請願することを決意した。これが全国に報道されるや大きな反響を呼ぶ。のちに実業家として成功した。1903(明治36)年、266年に渡って島民を苦しめた人頭税が廃止された。

先日ネット上で、宮古島銘菓「久松五勇士」という菓子に目が止まった。クリムを何層かの生地で包んだ姿が新島の銘菓「万代太鼓」とそっくりで、密かに「ここにも宮古島と新潟の縁？」と勝手に思っている。その由来となった「久松五勇士」の偉業については、司馬遼太郎の「坂の上の雲」に譲ることにして、闘いが続く現代の宮古島の不屈の勇士たちには遠く北信越からもエールを送りたい。

故郷の板倉区では1994(平成6)年に人頭税廃止から90年を記念して宮古島からの寄贈で石碑が建てられ、2005(平成17)年には中村十作記念館がオープンした。

宮古島と上越市板倉区の小学生の相互交流は今年で25年目になる。今年1月の交流会では、宮古島の児童が伝統芸能を紹介したりグラウンドで雪遊びを楽しんだ。南国の子供たちは雪にさそ驚いたことだろう。この先も先人が結んだ縁で交流が続くことを祈りたい。

北信越地連・中央執行委員 高津 和也 (新潟日報労組)



壇上で発言する安田さん(左から3人目)

## 事実の大切さ共有しよう

### 安田純平さん交えシンポ

### 戦場取材の意義を再確認

シリアで拘束され、昨年10月に解放されたフリージャーナリストの安田純平さんと自己責任論について考え

るシンポジウムが同年12月26日、東京都文京区民センターで開かれた。

安田さんは、自身に關する「日本政府が身代金を支払った」といったデマに言及した。こうしたデマが広がることで、日本人を人質にすれば日本が金を払うと認識されてしまう危険性を指摘。その上で、「事実なんてどうでもいいと言う人たちに、事実の大切さを共有することがスタートでは」と話した。

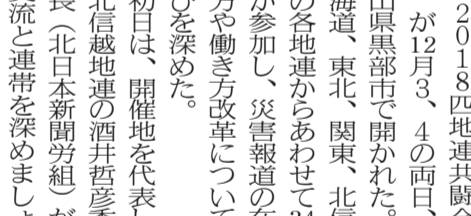
パネリストはカシヨシノでは安田さんも含め、戦場ジャーナリスト7人が登壇。なぜ戦場に赴くのか、その問いに対して、それぞれが考えを述べた。「戦争は、最も大きな不条理であり、最も価値のある取材対象」「日本人の目で見て、

日本語で伝えることが重要」といった意見が出され、今後も日本人ジャーナリストが紛争地に入り、取材を続けることの重要性を再確認した。

一方、「戦場に社員を行かせず、フリーランスに行かせる構図を打破していくべき」と、フリーランス頼みの現状を問題視する声も。新聞労連の南彰委員長は「我々の中から『やろう』という人を支えられる体制を作っていければ」と話し、組織ジャーナリズム体制の構築を訴えた。

シンポジウムは創出版と新聞労連などつくる実行委員会が主催。約500人が参加した。

【朝日学生新聞労組・八木みどり】



活発な議論が展開されたパネル討論

### 災害報道の在り方議論

「2018 四地連共闘会議」が12月3、4の両日、富山県黒部市で開かれた。

北海道、東北、関東、北信越の各地連からあわせて34人が参加し、災害報道の在り方や働き方改革について学びを深めた。

初日は、開催地を代表して北信越地連の酒井哲彦委員長(北日本新聞労組)が「交流と連帯を深めましょ



中村十作の功績を称える記念碑(上越市板倉区提供)

う」とあいさつした。

続いて学習会を開催。パネル討論で、北海道地連の牧之段英樹委員長(北海道新聞労組)と、東北地連の鹿糠敏和副委員長(岩手日報労組)がそれぞれ、北海道胆振東部地震への対応や、東日本大震災からの復興の状況について語った。

牧之段氏は、地震の際の北海道新聞の取り組みを紹介。自家発電で工場を連続20時間稼働させ、災害協定を結ぶ他社の新聞10紙を印刷したことを説明した。

鹿糠氏は、復興は進んでいるものの、被災者の移住によって加速した人口減をはじめ多くの課題が浮上していることを指摘した。

学習会では、4地連から「働き方改革」に関する報告もあった。

2日目は黒部市にある世界的ファスナーメーカー、YKKの製造拠点を訪ね、産業観光施設を見学した。

【北日本新聞労組・高橋良